

地域事例-1

まちの記憶を刻む

アルテピアッツァ美唄

アルテピアッツァとは、イタリア語で芸術広場を意味する言葉。そこには、自然、歴史、アートが融合した美しい空間が存在しています。美唄市出身の彫刻家・安田侃氏の作品が景色と溶け込むように配置された、新たな芸術文化交流施設・アルテピアッツァ美唄をご紹介します。



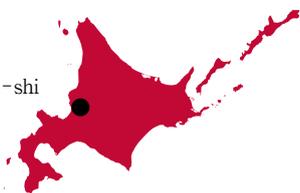
炭鉱の歴史を残す

美唄市は、かつて炭鉱のまちとして興隆を極め、ピーク時の1956年には9万人を超える人口がありました。市内には、三菱美唄炭鉱、三井美唄炭鉱と二大財閥企業が名を連ね、多くの炭鉱マンがこの地で生活をしていました。三菱炭鉱の炭鉱マンの子供たちが当時通っていたのが栄小学校でした。最盛期には1,200人を超える児童が通っていましたが、石炭から石油へのエネルギー転換により、'63年に三井炭鉱が閉山、そして'72年には三菱炭鉱も閉山したことで、人口流出が続き、とうとう栄小学校も'81年に廃校となりました。美唄市の人口は現在約3万人と、ピーク時の3分の1にも減少しています。栄小学校の体育館は住民のための体育施設となりましたが、ほとんど利用者はなく、また小学校の校舎とつながっていた幼稚園は残っていましたが、園児は少なく、先行きは決して明るいものではありませんでした。

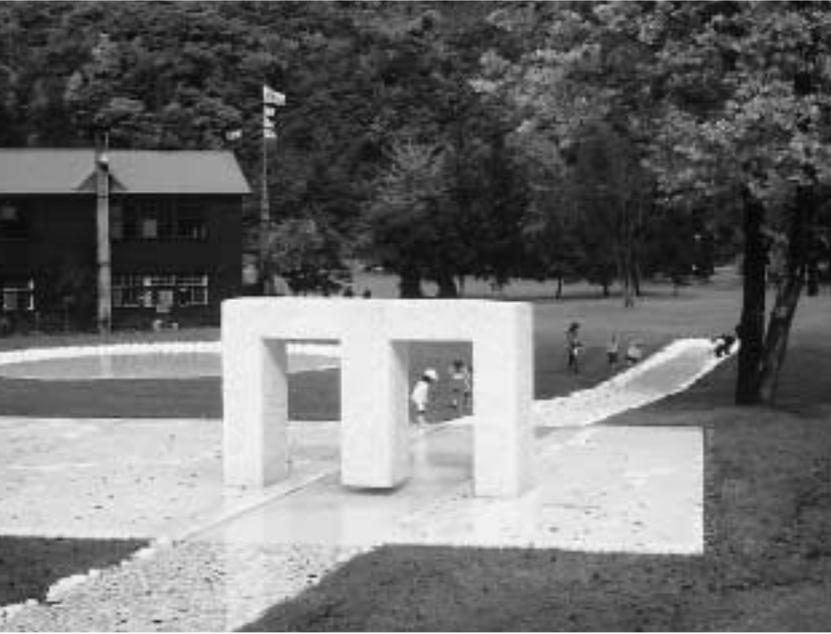
美唄市では、三菱炭鉱の立坑を保存した炭鉱メモリアル森林公園や、三菱美唄記念館など、市内に残る炭鉱の施設などを保存していますが、美唄市出身の安田侃氏は、炭鉱として栄えた地区に「炭山（やま）之碑」という大理石モニュメントを制作していました。そうした経緯もあり、当初は、旧栄小学校の体育館に、安田氏の作品を保管していただけの時期もあったようですが、その後、床、壁、天井など、徐々に改修を行い、体育館や野外空間に安田氏の作品を設置し、'92年にアルテピアッツァ美唄としてオープンしました。現在はスタート当初より敷地も広がり、駐車場なども整備されています。

アルテピアッツァ美唄の奥には、かつて三菱炭鉱で栄えた地区があります。今は廃墟と化していますが、自らアルテピアッツァ美唄に深い思いをもって

Bibai-shi



Case Study @ bibai-shi.



ARTE PIAZZA BIBAI



かかわっている安田氏は「そこを見てからアルテピアッツァを見てほしい。そうすると、この空間の意味がわかってもらえる」と言います。

炭鉱閉山後、市では公園整備を行うなど、この地区を盛りたてようと努力しましたが、炭鉱で栄えていた時代のように、ことは運びませんでした。しかし、炭鉱の閉山は炭鉱に依存しない新しいまちづくりへの出発点でもあり、また当時の記憶をしっかりと刻んでおくことが、まちとしても一つの財産になると考えたのでしょう。そうした思いからか、体育館や校舎の床や壁などは、できるだけ往時の面影を壊さぬように配慮して改修が行われています。当時の木造の建物としては典型的な手法で作られているのですが、そうしたものをしっかりと残していくことに意義があると考えているからです。

アルテピアッツァならではの 芸術と文化の交流

野外空間には真っ白な大理石で作られた大作『天聖』『天沐』やブロンズの『帰門』などの作品が配置されています。夏には大理石の白と、輝く緑とのコントラストが、秋には紅葉とのコントラストが、そして冬には降り積もった雪が、彫刻にまた違った表情を与え、四季折々に味わいがある風景を作り出しています。また、体育館では、講演会やコンサートなどを開催しており、これまでに詩人・評論家の大岡信氏や谷川俊太郎氏、ジャズピアニストの山下洋輔氏など、超一流のアーティストがアルテピアッツァ美唄を訪れています。300人も入るといっばいの体育館ですが、プレイヤーと観客が一体になれる距離、そしてこの空間に溶け込んだ彫刻が、ここにしかない、唯一の時間を演出してくれます。

アート、芸術などというと、とても遠い存在のよ

うな気もしますが、この空間にくるとなぜかほっとする、また来てみたい、本を持ってきて一日中ここで読書してみたい、そんな気にさせてくる不思議な空間であることが、この魅力の一つでもあります。

まちの記憶がアートと一体に

美唄市では、'91年から旧栄小学校体育館の改修を始め、オープン後、少しずつ、広場のなかの整備を進めてきました。広場の造成、駐車場の整備、夏になると子供たちの水遊び場となる『水の広場』の設置、そして現在は、幼稚園の2階に、安田氏の常設展示ルーム、休憩ルームを備えた市民ギャラリーも開設されています。地方財政難の時代でもあり、こうした施設への予算措置が厳しいなか、アルテピアッツァ美唄では入館料無料で市が運営管理しており、今後はこれを維持していくための仕組みをどうつくっていくかが課題といます。しかし、いまやアルテピアッツァ美唄は、まちの人の誇りにもなり、コンサートなどで市外からも多くの人が訪れるようになって、「美唄のイメージが大きく変わった」との声も聞かれています。最近では、わざわざ道外から噂を聞きつけてやってくる人も増えており、道内だけでなく、道外からも注目を集めているようです。また栄幼稚園の園児も市街からわざわざ車で通ってもと、定員を超えるほどの入園希望があるまでになっています。次代を担う子供にとって、アルテピアッツァの環境がどれほど可能性を秘めているか、計り知れないものがあるように思います。

今まで10年かかりで少しずつ歩を進めてきたアルテピアッツァ美唄。地域の人々の地道に取り組む熱意と、安田氏の故郷へのこだわりが、これほどまでに素晴らしい空間を生み出すのでしょうか。まちの記憶を刻むことに、アートが大きな役割を果たしています。